

就いて傳習し、隔月一回師範人と共に出館して講習する制であつた。その開校初期では、歩士並以上のもの及び子弟のみ出席せしめたが、後には打太刀方として陪臣・足輕にも出校することを許した。明治元年九月十三日經武館を壯猶館に合併し、舊式武術は盡く廢せられた。

ケイブカンミトドケ 經武館見届 藩の執政の老臣が月次定日を以て、代る々々經武館に赴き、各師範家門弟の演武を視察するをいひ、弘化の頃は三日・廿三日がその定日であつた。

ケイブンヨテキ 奎文餘滴 一冊。加藤恒の著で、加賀藩の學者が作つた漢文の粹を蒐集したものである。

ケイホウバ 刑法場 ↓クジバ 公事場。
ケイマ 雞馬 ↓セナミヤウイチ 瀬波屋宇一。

ケイマツムロダヒラ 慶松室平 白山の市、瀬口舊登路にあつて、尾平の上に續く。慶松室平にはもと慶松室があつた。白山遊記には、此の室を一に中室ともいふ。長三間幅二間、福井の人始屋慶松の建てた所としてあるが、今は存せぬ。この地標高一六五〇米許。

ケイメイマル 啓明丸 加賀藩有の帆船で、産物方用のものであつた。慶應元年五月長崎に於いて英人グラバから購入したものであるが、委細は判らぬ。閏五月十一日石川郡宮腰に入港した長十七間幅四間許とあるものこれであらう。

ケイモウシヤ 啓蒙舎 ↓オンチシヤ 温知舎。
ケイユウメイリン 圭邑名林 天は加賀、

地は越中、人は能登の三冊から成り、横本の小冊子で刊行せられてゐるが、年號も出版者もなく、巻初に『百物絶粹。不與賣人。』と書かれてゐる。内容は領内各國に就いて寺院名・社名・修験道寺院名・組附・村名等が集められて居り、藩末に近い頃のものであらう。

ケイリンイン 桂林院 大聖寺藩主第四代前田利章側室内藤氏の法號。詳しくは桂林院天室宗香大禪定尼。

ケイリンジヨウメイ 雞林情盟 一冊。三宅楠閣著。文化八年春著者は京師から對馬に至り、朝鮮の信使金履喬等の旅館以耐庵に於いて、その隨員の學士李顯相・金善臣・李明五・李文哲と會して互に文盟を試みた。本書はその時に成つた唱和の賦・古詩・律詩・絶句五十餘首と文六篇及び筆語數節を併せて編輯したものである。

ケイリンバヤシ 桂林ばやし 石川郡八幡領山にも同郡後谷領にもある。古木生ひ繁つた所で、泰澄が白山を開いた時暫く足を留めたなど傳へる。

ケガサ 筭笠 筭笠は石川郡の中宮部落の舊稱である。元亨釋書卷九に『釋藏縁。神融法師之徒也。云々。白山立山爲修練場。晚菴。白山筭笠二面居。』とある。

ケガサチユウケウ 筭笠中宮 石川郡河内庄中宮にあつて、白山七社の一つである。白山記に『有一勝地、崇山周八方、形似蓮華葉、地勢時如三岳、寶社立其上、是號筭笠中宮、本地如意輪也。神殿三間一面、拜殿五間三面。彼岸所七間二面。又小社五所。又七間二面講堂。本佛大日如來。五尺洪鐘在之。又有三間一面殿。又新寶殿三間一面。金峰

山小白山不動山御座。三間四面常行堂。本佛阿彌陀。三間一面法花三昧堂。本佛普賢菩薩。三間一面不動堂。夏堂鐘樓。』と記される。平家物語鶴河合戦の事に、『さらば山門へうつたへんとて、白山中宮の神輿かざり奉つて、ひえい山へあげ奉る。』といふも是である。

式内等舊社記にも『筭笠中宮神社。河内庄中宮村鎮座。白山比咩神社之中宮也。往古以來攝社多。白山七社之一也。』と見えるが、今は筭笠中宮神社と稱する小社があるばかりである。唯この境内には胸高周圍七米一、樹高三六米の七葉樹があり、地上周圍八米六、樹高二七米の桂の株などがあつて、その舊社たることを思はしめる。

ケカチヤマ 氣勝山 鳳至郡東中尾の部落西方に在る山。高さ三四三米。地質第三紀層。
ゲギヨウマイ 下行米 藩の給人が受ける切米及び扶持米の二種を總稱して下行米といふ。知行に對して起つた名稱であらう。

ケゴヤマ 鷄籠山 河北郡田島領に在る。鶴尾記に、戸室山の南にあるをケゴ山といひ、頂上の澤に澤菊・澤蘭を産するとし、又寶永誌には、この山に梨木があつて、泰澄が杖を立て置いたのが生付いたのであると記する。

ケゴイン 華嚴院 加賀藩主第六代前田吉徳の子八十五郎の法號。詳しくは華嚴院統嶽了傳居士。

ケシノハナ けしの花 一冊。金澤の俳人北枝遠逝當年の追悼集で、門下瀧充の序文があり、終に岩享保三戊戌初冬吉且梓調とあるが、上木せられたものではない。外題は北枝の辭世『書て見たりけしたり果は芥子の花』

から探る。
ケシヨウ 假生 河北郡井上庄に屬する部落。
ゲシロ 下代 鳳至郡山田郷に屬する部落。明治中に至り、坂尻・龍と合併して鮭尾と改稱した。

ケタ 氣多 羽咋郡一宮には同國の一宮である氣多神社が鎮座する。この氣多の語は、出雲風土記に、杵築大社の所在たる出雲郡に氣多島があり、古事記に、素戔の故事を傳へる稻羽の氣多前があると似て居る。語義の何であるかを知らぬが、大國主神と氣多の地名との關係あるを思はしめ、隨うて能登と出雲との海上交通に想到せしめるものもある。

ゲタイ 下代 ↓ゲシロ 下代。
ケタシヤオウキ 氣多社應記 一冊。貞享二年能登一宮の由來書に、氣多社應記一冊、氣多社御由來記一卷とあつて、當社の舊記であつたが、今は傳はらないやうである。

ケタジンジャ 氣多神社 能美郡岩内にあつた。式内等舊社記に、『氣多神社。山上郷岩内村鎮座。今稱氣多明神。或云能登一宮之御子神也。』とある。明治の初氣多社といひ、四十一年氣多神社となり、四十二年岩内神社と改めた。

ケタジンジャ 氣多神社 (一) 概説―羽咋郡一宮寺家に鎮座する。蓋し延喜の制に加能二國中にありて名神大社であつたものは、獨本社あるばかりである。桓武天皇延暦廿三年六月十三日の令に、『能登國氣多神社等の宮司、人々競望を懷ひ、各譜第と稱す。自今以後、神祇官舊記を検し、常に氏中の事に堪ふる者を簡ひ、擬補して官に申せ。』とあるによれ